

尊者ガムポパの口訣：最勝道宝鬘 第2章 5偈6偈

第二 必要な十法

五偈 細心の正念と正知によって、三門を錯誤で染めないことが必要である

六偈 武器と意思力で本尊に依り、変わらぬことが必要である

ドルズイン・リンポチエのご法話（2024年4月20日）より音声文字起こし

（五偈） 細心の正念と正知によって、とありますけれども心の中に正念・正知を持つ必要があります。これは自分が何をしているのか、というのが分かることです。

何をしているのか分かる、正念というのは何かといいますと、例えば自分が受けた帰依戒や比丘戒やその前行を行うと約束したこと、もしくはその前行のなかで五体投地を行う、であるなり本尊を瞑想するなりということの思うことが正念になります。そして正知というのはそれを実際に行っているのか、善をなしているのかどうかというのを分かる、行うべきことと捨てるべきことを実践しているのかどうか分かることが正知です。で何度も何度も考えてそれを確かなものにしていきます。ここで細心の、というのがありますがこれはその正念・正知と似ているのですが、注意を払って放逸とならずに善を行っていくことです。注意して行うことをここでは細心の、というふうに言っています。これは正念・正知と似ているんですけども、これによって細心の注意を払うことによって、不善に陥ることなく善を行っていくことができます。

（六偈）次に6番目、武器と意思の力で本尊に依って変わらぬことが必要である、とありますけど、ここでいう武器とは煩惱のままにならず、煩惱の自由にならずに正念・正知に依ることを、ここでは武器というふうに言っています。ここでその意思力、意思の力とあ

りますけど煩惱に流されない、煩惱に染まらないというのは簡単なことではありません。これは非常に難しいことですので、その際に意思の力というものが必要になってきます。これは何か仕事をしようとする時にも、自分の意思が強くなければ仕事をできないのと同じで、意思の力がなければ煩惱に流されていきます。何か心でこれをしようと思ったことをいつも行っていく、そういう強い力が意思の力が必要なわけです。

(質問 煩惱に流されないとはどういう状態ですか)

(答 ドルズィン・リンポチェ)

いい質問だと思います。これを話した方が良かったですね。例えば人と話をしているときに、相手がうそをついたり何か自分を害するようなことをしたときに、自分が怒ったりとか不善の思いを起す、というのも煩惱の方に入っていきます。相手が何かするかしないかというのは問題ではなくて、自分の側がそういう思いを起すかどうか、というのが煩惱を起すかどうかということになります。で、煩惱を起すときに身体で起すものと語で起すものと心で起すものとがあります。実際に身体では人を害したり、人を殺したり盗みをおこなったり不倫をおこなったりとか、そういう大きな害もあるんですけども、そんな大きなものでなくて小さなもの、例えば相手をにらみつけるような見方をするとか、ぶつかったりとか相手に対して無礼な態度、礼儀を欠いたような態度をとるというのも、煩惱の方に入っていきます。例えば満員電車とか人がたくさんいる時にぶつかって、ぶつかられたという風に怒ったり、人と話している時も荒々しいしゃべり方で話す、というのも煩惱の方に入っていきます。心のなかで起す煩惱の中に、妄想とか妄分別を生じさせる、というものがありますけども、自分の中にそういう妄想というのが生じてくる、その全てが悪いわけではありません。生じた思いというものを正念・正知というもので、自分で理解することが必要なわけです。で、皆さんに出来るかどうかやってみてくださいと言ったんですけども、皆さん人と話したり家族と電話で話したりとか、いろいろ誰

かと話したりされたと思われるんですけど、相手がうそをついている場合があります。するとそれがうそだと分かった時に、それが本当かどうかは分からないんですけども、それを置いて自分自身がそれに対して怒ってしまう。怒るということがあった時、それに対して「あ、ダメだ」というふうに正念・正知によってそれを理解していく。相手が何を言ってもいいや、何か言っても「いいですよ」と気にかけないことが正念・正知を持つということになります。

（「錯誤」についての質問へのリンポチェの答え 最初好きで一緒になった人がやがて嫌いになり別れる場合を例に）

最初と最後も錯誤しているわけです。錯誤がなければすごく良いとも思わないし、反対にすごく悪いとも思わない。これらはどちらも錯誤なわけです。このように真実として成立していないということが理解できたならば、これが悪いとかこれが嫌い、これはいらぬとかそういう思いも起こってこないわけです。悪いとか良いとかも心が作り出しているものです。もしこれが本当に成り立っているなら、ずっと変わらないはずなんですけれども、そうではなくて変わっていく。最初は良いものであったものが、最後悪いというふうになるのは真実として成立していないからそのように変わっていくわけです。これが輪廻のあり方なわけです。ですが、仏や菩薩という人たちはこのように誤った考えは持っていないので、真実として執着もしていないので最初から良いと考えて執着することもなく、反対に悪いと考えて嫌うということもないわけです。例えばこれは何か幻のようなものを、これは本当だというふうに捉えてすごく執着する。美味しいというふうに考えて、執着するようなものです。しかし本当はそのすばらしいというふうに考えたり、美味しいというふうに考えているのは、自分の側がそういうふうにとらえているわけで、自分がそういうふうに本当だと思っているわけです。このようなことをちゃんと理解するならば、対象に対して執着することがないわけです。

「意思力」の意思について

Webllio 辞書より

〔意思〕 行動や選択をする際の元となる内的な心の動き。どう思っているか。

リンポチェはご法話のなかで、

「錯誤がなければすごく良いとも思わないし、反対にすごく悪いとも思わない。このように真実として成立していないと理解できたならば、これが悪いとかこれが嫌いだとかそういう思いも起こってこないわけです」

「もしこれが本当に成り立っているなら、ずっと変わらないはずなんですけれども、そうではなくて変わっていく。最初は良いものであったものが、最後悪くなるのは真実として成立していないからそのように変わっていくわけです。これが輪廻のあり方なわけです。」

と説明されています。事物が真実として成立しているという錯誤は、縁起によりたえず変化している事物を固定化して、良い人、悪い人という本質があるように思ってしまうことを指していると思うのですが、ある人が言ったように「世界は私が見ているようには存在しない。」ということでしょうか。

前回、清野さんがミラレパについてとても興味深いお話しをして下さいました。ミラレパはガムポパ大師の師であり、事物が真実として成立していないということを美しく歌っています。以下に引用させていただきたいと思います。

「一般に三界を輪廻する衆生には

欲望の様々な菩提がある

我執の見解の別意がある

その業は様々である

基体を「我」と見ることは非常に多い
お前たち患者の考えていることに
合わせて一切智者である仏は
「全てはある」と説かれた

勝義諦においては
悪魔はおろか仏もない
修習する者も修習される対象もない
歩むべき地も道標もない
果である仏身も智慧もない
それゆえ涅槃もない
名と言葉によって仮説されただけ
三界は堅固な〔器世間〕と動く〔有情世間〕からなる
本来は成り立たず、不生である
基体はなく俱生起はない
業と業の異熟はない
そのため輪廻という名もない

究極的にはそのようである
ああ、衆生がなくなれば
三世の仏は何から生じるであろう
無因の果はありえないので
世俗諦においては
輪廻と涅槃の

全てはあると釈迦牟尼は説かれた
実在するものとして現れている「有」と
空の法性である「無」の二つは
存在を分けることは出来ず一味である
自証と他証はなく
一切は広大な双入である

そのように証解した智者は
識ではなく智慧が見え
衆生ではなく仏が見え
有法ではなく法性が見える
そこから悲の力が生じ
〔十〕力と無畏、真言など
仏の功德全てが
宝珠のように生じる」

「チベットのロックスター 仏教聖者ミラレーパ 魂の声」より

著者 渡邊温子

次に引用する文章は、高地に住むチベット仏教徒のメンタリティーと信仰心について書かれています。

「チベット 聖地の路地裏」

——八年のラサ滞在記—— 著者 村上 大輔

ラサの祈りの中心地・ジョカン寺（大昭寺）——古代インド由来の釈迦牟尼像をご本尊として祀り、チベットに仏教が伝わって千数百年もの間、チベット高原を包み込む大聖地

として、貴賤僧俗を問わず信仰を集めてきた。その寺院の前では、朝夕熱心に五体投地をする人で溢れかえっている。地方から大勢の巡礼者のやってくる冬には、それこそ〈祈りの大空間〉と化す。チベット人の頑かたく々なまでの純粹さが目の前に悠然と繰り広げられているその様は、たとえ仏教徒でなくともこころ揺さぶられる。(中略)

祈りの中身は、現世利益のものから密教の観想まで様々である。そのなかでも最も切実な祈りはやはり、「来世」についてであろう。「畜生ちくしょうや餓鬼がきではなく、来世も人間に生まれ変われますように」。

熱心なチベット人仏教徒たちは、六道輪廻ろくどうりんね(**)の世界を肌身でリアルに感じている。ちょうど我々が、地球という惑星が自転をし、太陽の周囲を回っているという科学的事実を「知っている」のと同じような認識レベルで輪廻を捉えている。つまり彼らにとって生まれ変わりとは、信仰の問題などではなく、厳粛な事実ファクトそのものなのである。もちろん、ダライ・ラマが観音菩薩の化身であるという教えも同じく事実なのであり、聖性の極みである彼がこの地上に奇跡的に顕現していることに、現代のチベット人はこの上ない幸せを感じている。

そしてチベット人の生きている世界をことさら深いものに行っているのは、こころや祈りといったものが自分の生きている輪廻の世界に直に働きかける、という生々しい感覚である。そこに彼らの信心深さの秘密がある。(中略)

チベット人に伝わる大切な仏陀の偈

比丘や賢者たちは、金細工師が
金を熱し、切り、磨くのとおなじように、
よくよく私の言葉を吟味してから受け入れるように。
尊敬の念だけでそうしてはならない。

この偈の意味について、ちょっと立ち止まって考えてみる。厳密な意味において、仏陀の言葉を最初から突き放して吟味するなどそもそも可能なのであろうか？ 仏陀の言葉を理

知的に吟味した後初めて信仰心が生まれるのだろうか？それはやはり否であろう。仏教に対する親しみや信仰心がなければ、そもそも吟味しようとする心も湧かない。言葉を吟味せよ、といった仏陀を、吟味なしにすでに信仰しているのである。つまり無信仰から信仰へではなく信仰から信仰へ人は導かれていく。理知を媒介としながら。

理知と信仰心は互いに矛盾し合う概念としてよく対峙される。だが理知や合理性といったものを下支えするものは畢竟、ある種の信仰心なのではなかろうか。文脈は異なるが、ルネサンス以降のヨーロッパで生まれた科学や近代合理主義といったものは、神の御業＝自然に近づこう、それを理解しようとする宗教的動機とは無縁ではなかったのではなかったか。

仏陀の偈から話が急に大きくなってしまった。だが、崇高な教えと自分とを絶対的に対峙・並立させようとするこの偈は、言語レベルの単なる忠告を超えて、なんとというか、宗教の果てへと我々を駆り立てているような気がするのである。

著者の村上大輔さんは人類学者の視点から、チベット人仏教徒について考察されています。ですからルネサンス以降ヨーロッパで生まれた科学や近代合理主義を、仏陀の偈から急に話が大きくなってしまった、と書かれています。が仏教徒の私から見ると、仏陀の偈の方が実は大きな話だと思ってしまう。ここには世俗諦としての輪廻と涅槃の全てがあります。一切は広大な双入であり、そして信仰心には願いが含まれています。それは未来に対する希望や、幸福な生活を願うことだったりします。願いと信仰心はどこか似ているような気がします。最初は利己的な願いがやがて、利他的な願いに移っていくことがあれば、宗教の果てに行き着くことが可能なのでしょうか。